

H-2:産学官連携

開催日時・会場 9月18日(金曜日) 10:45 - 12:15 会場C

産学連携を起点とする新たな研究力強化の方策とは

CSTIでの大学改革議論を皮切りに、国立大学でも産連改革が進み、包括的産学連携や外部資金獲得拡大への組織的取組が強化されつつある。しかし、それにつれて産学共同研究で研究者の自由な研究時間が奪われることや、研究シーズの青田刈り、契約の縛りに伴う知財確保や幅広い研究機会喪失へのリスクが懸念される事例が生じている。その結果、研究シーズを育成し、将来のベンチャー起業育成や企業との大型連携、あるいは新規研究拠点形成に資する競争的資金の獲得において、将来機会の喪失や長い目で見た知の資産の毀損が懸念されるケースも見受けられる。URAの現場での取組において、そのようなジレンマの下で、いかに学内での意思疎通を図り、研究者の知財やアイデアの保護、契約等に向けてリーダーシップを執って取り組むべきか、具体的事例も交えて意見交換したい。また、企業と大学とが信頼関係を醸成させる企業人材育成への取組みなども解決に資する事例である。当セッションでは、このような大学の現場で生じるいくつかの事例紹介と、リスク回避しながら産連支援と研究力強化支援活動との両立に奮闘するURAの業務に焦点を当てたい。特に、研究シーズの育成や知財の保護・契約に関する知識とリスク回避への対策、予算獲得、学際領域間でのリエゾン機能、研究者雇用の仕組み創設など、従来の産連人材にはなかった、高度な提案力と実務スキルが求められていることから、そのような現場視点で「URAの産連活動と人材育成のあり方」を考察したい。先に開催のH-1セッションでは、産連改革で大学が新たに取組む活動の好事例、新たな仕組み等を中心に取扱い、このH-2セッションでは、そのような取組みの中から生じる事例紹介などを通じて問題点を掘り起こし、解決への創意工夫など、東北大学と九州工業大学の課題への取組状況を紹介し、会場の意見や経験事例、問題提起などを受けて、広く課題意識を涵養したい。

セッション担当者

根本 靖久:東北大学 研究推進・支援機構URAセンター
副理事/首席URA/特任(運営)教授

東北大学医学研究科、学振特別研究員(DC,PD)等を経て、製薬企業での研究企画、技術の目利き、新規事業立上げ、ベンチャー経営等を経て、東北大学本部URAセンター立上げ、研究大学強化促進事業・COI東北拠点のプレアワード他企画運営等に関与。内閣府CSTI第1期上席科学技術政策フェローを3年半兼務。現在は研究力強化や次期研究拠点企画に向けた学際融合研究支援、シーズ育成、起業育成支援、大型産連支援等の実務全般を手掛ける。

登壇者

安藤 義人:九州工業大学

オープンイノベーション推進機構 産学官連携本部
国際・研究推進戦略担当マネージャー・准教授



2010年九州工業大学准教授に着任。2015年マレーシア・サテライトキャンパスMSSC副オフィス長を兼務。2017年現職に着任。研究者と大学運営の両方の視点で研究と国際連携の促進を図る。2020年MSSCオフィス長、グリーンマテリアル研究センターのセンター長を兼務。これまで研究メンバーとしてJSPS 頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム、新産業創出拠点プロジェクト(START)、JST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)を経験。

佐藤 準: 東北大学 研究推進・支援機構URAセンター
上席URA/特任准教授

小樽商科大学化学助手を経て札幌市内の環境コンサルティング企業で化学分析・調査・研究・企画、新事業開発を担当した。札幌医科大学・小樽商科大学の文部科学省派遣産学官連携コーディネーターを務めた後、2013年東北大学URAセンター着任。プレ・ポストアワード、産学連携制度の改善に取り組む。

稲穂 健市: 東北大学 研究推進・支援機構URAセンター
上席URA/特任准教授

弁理士、米国公認会計士(デラウェア州Certificate)。大手電気機器メーカーの知的財産部門、米国研究開発拠点などを経て、2014年より現職。米国時代はプロジェクト管理や契約業務を担当。現在はセンター・オブ・イノベーション(COI)東北拠点の戦略統括として、BUB連携体制の構築、ベンチャー創出支援のほか、学内外のステークホルダーとの調整などを担当。

松原 雄介: 東北大学 研究推進・支援機構URAセンター
URA/特任助教

民間企業での研究者を経て、2015年より東北大学URAとして、センター・オブ・イノベーション(COI)事業における拠点運営、研究推進・企画や、官民イノベーションプログラム(BIP)でのベンチャー化支援など、主にポストアワード系活動に従事している。
最近では、組織対組織の連携や、コンソーシアム・拠点型の研究開発など、ポストアワードでの経験を活かしプレアワードにも力を入れつつある。JSTのプログラムマネージャー(PM)研修の4期生。